

Si-report

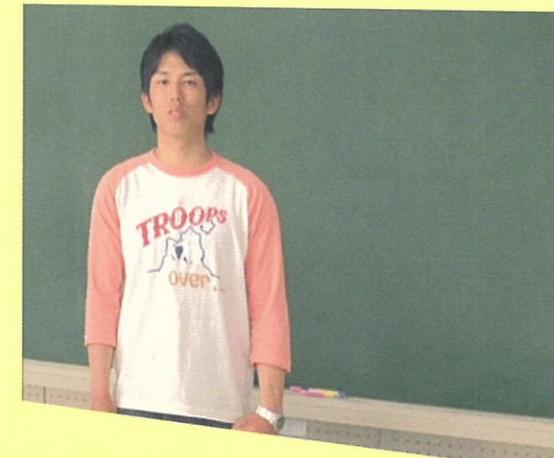
Vol.4

Socio-Intelligence report



専修大学のビジョンと現状

2009



フジテレビ系「FNNスーパーニュース」番組内
2008年4月1日～2009年3月31日放映

コピーライター：渡辺潤平
※コピーの無断転載を禁じます。

他人から見た自分ではなく、
自分から見た自分、に問いかける。
これから何がしたいか。
ここからどこまで飛べるか。
自分の歩くべき道は、
人に尋ねても見つからない。
「あなたにとって、大学とは？」
社会知性を育てる大学。

専修大学

—「対話」篇—

記念すべき創立130年
歴史と伝統を再認識しながら
大学改革を一層推進する

学校法人専修大学理事長
専修大学長 日高 義博

2009年9月、本学は創立130年を迎えます。前世代が築いた歴史を振り返り、現世代の果たすべき役割は何か、現在の問題をどう解決し、次世代に何を残すべきなのか。このことを常に意識し、この記念すべき節目の年を実りあるものにしたいと思います。

創立者たちが教壇に立ち、学生に直接熱き思いを伝えた第1世代。関東大震災後の再建から学徒出陣まで、苦難の中で旧制大学の時代を築いた第2世代。戦後の焼け野原から出発し、新制大学として復興を遂げた第3世代。学生数が飛躍的に伸びる中、大きな推進力を持って大学拡張の時代を築いた第4世代。そして第5世代といえる現世代は、「全入学時代」の中にある、大学のあり方自体を見直さなければならない「大学改革の時代」にあります。本学はすでに21世紀ビジョンとして「社会知性の開発」を掲げ、骨太の大学改革に取り組んでいます。このビジョンには、日本における私学の魁としての気概が込められています。

大学教育のあり方が問われ、学生の質の保証が求められるようになった今、大学の個性と特色を明確にし、教育においても研究においても、現場に活力がなければなりません。新しい時代に対応するためのキャンパス整備にも、段階的に着手しています。

創立130年を迎える本年は第5世代の趨勢を決する上で極めて重要な年です。専修大学の歴史と伝統を再認識しながら、学生、教職員はもちろんのこと、校友会ならびに育友会の皆さんとも一体となり、本学の有する大学力をパワフルに示していきたいと思います。

■ Profile

1948年(昭和23年)宮崎県生まれ。70年(昭和45年)専修大学法学部卒業。75年(昭和50年)明治学院大学大学院法学研究科博士課程単位取得退学。84年(昭和59年)専修大学法学部教授。2004年(平成16年)法科大学院教授。同年学長(現在に至る)。2006年(平成18年)理事長就任(現在に至る)。今村法律研究室長、法学部長、学外では司法試験考查委員、法制審議会臨時委員などを歴任。専攻は刑法学。法学博士。『不真正不作為犯の理論』(慶應通信)、『刑法における錯誤論の新展開』(成文堂)、『違法性の基礎理論』(イウス出版)など著書、論文、翻訳、エッセー多数。居合道5段。



▶▶▶ 建学の精神と21世紀ビジョン「社会知性の開発」

専修大学は、1880年（明治13年）、米国留学から帰国した4人の若者により創立されました。相馬永胤、田尻稻次郎、目賀田種太郎、駒井重格の創立者たちは、明治維新後、米国のコロンビア、エール、ハーバード、ラトガース大学にそれぞれ官費や藩費により留学し、米国の方で「専門教育によって日本の屋台骨を支える人材を育てよう。そのことが海外で長年勉強する機会を与えてもらった恩に報いることだ」と考えました。帰国後、経済学や法律学を教授するため本学の前身である「専修学校」を創立しました。わが国があらゆる分野において新時代を担う人材を求めた時代にあって、留学によって得た最新の知識を社会に還元し、母国日本の発展に寄与しようとしたのです。いち早く近代法の考え方をわが国に根付かせようとした本学は、五大法律学校の一つとして重要な役割を担いました。

以後、本学は関東大震災や戦禍などによっても極めて困難な状況に直面しながらも、学窓の灯火を守り続けてきました。21世紀に入った今日においては、私学全体にふりかかる大きな荒波を乗り越え、さらなる発展を遂げなければなりません。常に創立の原点に立ち返り、本学の進むべき指針を熟慮するとき、必ず道は拓かれます。その指針として、本学は建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」を現代的に捉え直した「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」を21世紀ビジョンに据えました。社会知性の開発をどのように具現化するのかについては、各学部あるいは大学院の各研究科によって方法論も力点も自ずから異なりますが、各部局において積極的かつ真摯な取り組みがなされています。



相馬永胤『米国紐育州訴訟法 全』(明治16年)

専修大学の前身である「専修学校」で使用された、相馬永胤先生著の教科書。当時、法律、経済の用語の日本語訳は存在していなかったが、創立者たちは、日本語で学ぶことの重要性を考え、専門用語を日本語に訳し、日本語による専門教育を始めたのである。



相馬永胤
(そうま ながたね)



田尻稻次郎
(たじり いなじろう)



目賀田種太郎
(めがた たねたろう)



駒井重格
(こまい しげただ)

▶▶▶ 専修大学21世紀ビジョン

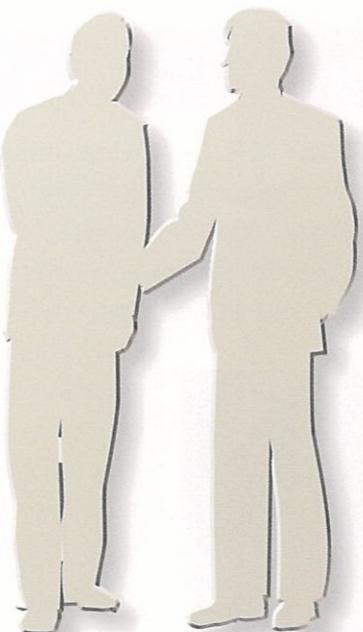
21世紀の今日、グローバル化の拡大と異文化交流の進展、情報化の加速、少子高齢化の進行など、我々が取り組まなければならない課題が山積しています。これらの社会的課題を解決するためには、地球的視野から諸問題を捉える力、創造的発想力、さらには深い人間理解や倫理観が求められます。

こうした新時代の社会で求められる知性こそ、「社会知性」だと専修大学は考えます。それは、学生一人ひとりが自己実現に生かせる知であるとともに、「専修大学が創り育てる知」でもあります。21世紀において本学は、「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」のビジョンのもと、「学生を基本にすえた大学づくり」を念頭に諸施策を推し進め、社会知性開発大学としての道を歩んでいくのです。

専修大学21世紀ビジョン

「社会知性（Socio-Intelligence）の開発」

専門的な知識・技術とそれに基づく思考方法を核としながらも、深い人間理解と倫理観を持ち、地球的視野から独創的な発想により主体的に社会の諸課題の解決に取り組んでいける能力である



『学生を基本にすえた大学づくり』

「社会知性の開発」を目指し、教育・研究の一層の充実に取り組みつつ、「学生を基本にすえた大学づくり」のために全教職員は歩み続けます

目標：さらなる競争力の向上と大学全体の質的レベルアップにより、オール専修大学の総合力で私立大学上位10位以内を目指します

創立130年記念事業

～2009年9月、専修大学は創立130年を迎えます～

サテライトキャンパス完成

創立130年記念事業の一環としてサテライトキャンパスがオープンし、2009年1月14日、開所式が行われました。小田急線向ヶ丘遊園駅前という利便性の高い立地を生かし、総合インフォメーション、生涯学習、公開講座、大学の教育研究成果の発表などを行うほか、地域と大学との交流の場としても機能します。つまり、「地域貢献」をいっそう持続的に発展させるための、「知の発信拠点」です。開所式には阿部孝夫川崎市長も出席され、祝辞をいただきました。



サテライトキャンパスは「アトラスター向ヶ丘遊園」（地上23階、地下2階）内に位置し、床面積約140坪の中にスタジオや多目的ホールなどが設置されます（写真）。

日高義博理事長・学長は「駅前という地の利を生かし、大学のミッションの一つである地域貢献・社会貢献の場として活用していきたい。川崎市との連携の核となる場や、生涯学習の拠点として利用し、地域密着型の大学として地域の方々にも利用していただけるようにしていきたい」と語っています。

4月からの本格使用に先駆け、開所記念公開講座として「身近な経済学～小田急沿線の生活風景～」を3月に開催。盛況なスタートとなりました。KSコミュニケーション・ビジネス・アカデミー（p9）の第2期講座（5月～）も、サテライトキャンパスで開講します。

所在地 川崎市多摩区登戸2130-2 アトラスター向ヶ丘遊園2階

人間科学部、誕生。文学部、7学科編成に ～2010（平成22）年4月開設予定～

大学改革に取り組む本学の大きな一歩として、2010年4月に新学部として人間科学部（心理学科・社会学科）を開設するとともに、文学部を再編します。人間科学部は、文系の総合大学として歩んできた本学の道筋に新たに実証科学の視点を取り入れ、学問領域のさらなる充実をめざすものです。文学部は、これまでの実績をもとに新学科を含む7学科を設置し、新たな挑戦を意図しました。伝統とともに、時代が求める、より高度で専門的な学びの環境を提供し、次の時代を歩み出します。

人間科学部

心理学科
社会学科

文学部

人文・ジャーナリズム学科
日本語学科
日本文学文化学科
英語英米文学科
哲学科
歴史学科
環境地理学科

新書版「SI Libretto」シリーズの刊行



「社会知性の開発（Socio-Intelligence）」の頭文字をとり、かつ内容を分かり易く解き明かした手軽な小冊子という意味を込めて、「SI Libretto（エスアイ・リブレット）」を専修大学出版局から刊行します。第1弾『人は何を旅してきたか』（平成21年3月）に続いて、第2弾『身近な経済学～小田急沿線の生活風景～』を平成21年4月に刊行予定。「社会知性の開発」の一端を担う本として、本学の教育力・研究力をもとにした社会への「知の発信」を積極的に行っていきます。

学生を基本にすえた大学づくり

～「“想い”を伝え、継承させたい」学生有志による活動～

学生有志8名が国際協力を通じて カンボジアの子供達からもらった宝物

「国際交流のため」「教育に興味があり海外に学校を建てたい」などそれぞれの想いをもったメンバーは、S·I·A（主に発展途上国への国際協力サークル）で出会い、カンボジアスタディツアーニーに参加。内戦の被害者が強制的に集められた村を訪れ衝撃を受け、AIDSの現状を知ることになります。自分達で何かしたい、そんな気持ちを後押ししたのは、ツアーで知り合ったNGO国際人権ネットワーク代表の緒方由美子さんの「物やお金での支援ではなく、何か行動をして欲しい」という言葉。訪問時に受けたものなしに「何か恩返しを」との気持ちから、ツアー参加の6名に賛同者2名が加わり、カンボジアの村での“お祭り”を決意します。

各自がアルバイトに励み、毎月一定額を共通の口座に貯金。さらに、企業に自分達の計画の趣旨を説明し寄付を



カンボジアの若者3人を日本へ招く（2008年10月）

募るために走り回った結果、ノート300冊と菓子類750袋の贈り物を持って一年後に再訪することができました。普段、灯りのない村に100個のちょうちんが点り、音楽に合わせ踊り、花火やキャンプファイヤーをしたりとお祭りは大成功に終わります。「灯りが点った時の子供達の目の輝きが忘れられません。言葉はほとんど通じないけれど、心が通じたのを感じました。」と有志メンバーの代表・里吉謙一さんは振り返ります。その後も訪問を繰り返し、交流を深めてきました。

「後輩には、想いがあれば活動していくという私達の姿勢を受け継いでもらえたならと思っています。」と話すメンバーも、この「想い」と「力」を胸に、4月からは社会人として歩み始めます。



お祭りで子ども達と花火

付属高校連携活動と高大連携活動を支える 学生有志によるHi・Yo・Coの会

全国に4校ある専修大学付属高校と大学を繋ぐ「付属高校連携活動」、地域貢献の一環として近隣高校との連携に取り組む「高大連携活動」を大学とともに支えているのが、20名ほどの付属高校出身学生有志による「Hi・Yo・Coの会」。

同会では、様々なイベントを企画・運営しています。入学が決まった付属高校3年生を対象に、履修方法や単位制、講義の様子などの勉強面はもちろん、最新の大学生ファッションや学食情報を紹介。自分たちで編集・制作したチラシも配布します。また、休みを利用して玉名や北上の母校に足を運び“先輩と語る会”などを実施。高大連携活動では、高校生が大学の講義を聴講する制度のサポートーやキャンバストアの案内役を務め、「身近な大学生」として活躍します。高校生にとって大学に関する情報は少なく「自分達が大学進学の際に気になっていたこと」を伝えることで「少しもある不安を取り除いて、専大の仲間になって欲しい」という気持ちで取り組んでいます。「高校生のため」が最大の目標でありながら、高校の先生にも満足してもらえる内容を意識する。そのバランスが難しいところ」なんだとか。活動するときはメンバー全員が「自分達が専大の顔、という気持ちでいます」と話すのは元会長の川上一輝さん。

今年発足から丸3年となったHi・Yo・Coの会・現会長の菊池慎也さんは「この会が後輩に引き継がれ、伝統ができることが楽しみです」と今後の抱負を話します。高校生やその保護者と専修大学の橋渡しをする彼らの活躍は、大学にとって大きなものとなっています。



Hi・Yo・Coの会のメンバー同



キャンバストアで高校生を案内

視点
1

社会知性を育む教育

「IMAGING KAWASAKI」 ～「映像のまち・かわさき」推進フォーラム支援企画～

ネットワーク情報学部「IMAGING KAWASAKI」プロジェクト



マスコットキャラクター企画
「かわさき マチ」より



プロジェクト発表会の様子

学生たちによるプロジェクト「IMAGING KAWASAKI」(指導教員:福富忠和教授)では2008年度、「映像のまち・かわさき」推進フォーラムに協力し、企画・提案を行ってきました。「映像のまち・かわさき」は、川崎市が新たな魅力創造に向けて設立。本学と川崎市が2008年10月に締結した連携・協力についての包括的協定に基づく事業として参画するものです。

「このプロジェクトは、私たち学生の学びの場である一方、川崎市や、関係する各企業にとってビジネス。双方にメリットがあるものとなるようビジネスマナーも学び、実現可能な企画となるよう、業界研究にも力を入れました」と語るのはリーダーの長谷川雅弘さん。「VJ(※)・映像フェス」企画を立案した橋本瑛史さんは「求められたのは大学生ならではの発想。川崎市や企業から具体化に向けた機会やアドバイスを頂くことで、実現に近づいていると感じます」と語ります。この他に「映画館」企画や、マスコットキャラクター企画なども。宇佐美翔平さんデザインのキャラクター「かわさき マチ」は市からも注目され採用が検討されています。プロジェクトメンバーのうち数人は、卒業制作として企画を継続。「後輩たちはこれまでのプロジェクトで構築された人脈の中で、新たな企画を考えているようです」と「映画館」企画担当の関澤憲治さん。彼らのエネルギーは大学をも飛び出し、社会へ向けて発信されています。

(※) visual jockeyの略。DJがレコードを組み合わせて音楽をつくるように、クラブやコンサートで音楽に合わせて映像等を流す。

第14回「大学生意識調査プロジェクトFUTURE2008」 専大生として初、首都圏4大学の代表

市原 玲菜さん 経営学部経営学科4年次生



代表を務めた市原さん



プレス発表会の様子

「広告・マーケティングに興味を持ち、受験でも第1条件。専修大学に入學して、ゼミ選択では迷わず広告戦略研究の石崎徹教授のゼミへ」という市原玲菜さんは、「大学生意識調査プロジェクト」に高校時代から注目していたといいます。2008年度、ゼミ同期の岡部梓さん、田中利奈さんと共に念願の参加を果たし、市原さんは専大生として初めて、首都圏4大学(専修・上智・東洋・早稲田)からなるメンバーの代表を務めました。このプロジェクトは1995年から続いているもの。広告・マーケティングを学ぶ大学生が集まり、企画・実施・分析の一連の作業を8ヶ月間かけて行います。

今回の調査テーマは、「大学生とケータイ」。テーマの決定も学生たちにゆだねられ、「最終的にプレス発表を行うことも視野に入れニュースバリューのあるものをと考えました」。アドバイザーとして博報堂社員の方がつくものの、アンケート項目の内容など自分たちで試行錯誤しながら作成します。

「想定結果と合っているか、異なる場合の理由を分析し結論を導くという、規模こそ違いますが、マーケティングの実践を学べ、本当に貴重な経験でした」。毎週出される課題に、異なる大学のメンバーが週5~6日集まり話し合いをして翌週には発表という日々。大変な思いをしながらも「振り返れば充実感のほうが大きく、自分自身の成長も実感しました。代表という立場は責任の重いものでしたが、自分の舵取り次第でチームの雰囲気も変わることや、メンバーが本音で話し合うことでチーム力が変わるなど、リーダーならではの経験も。社会人になってもこの経験を活かし第一線で頑張っていきたいと思います」と語ってくれました。

目標の現役3年次生合格を達成 ～公認会計士試験～

阿部 裕泰さん 商学部会計学科4年次生



合格祝賀会での
阿部さん

2008年度の公認会計士試験で、在学生7人を含む37人が本学から合格、うち3年次生で合格した4人全員が、エクステンションセンター会計士講座の受講生。阿部さんもそのひとりです。12月15日に神田校舎で行われた司法試験・新司法試験・公認会計士試験の合格者祝賀会では、合格者代表の挨拶を務めました。

阿部さんは「大学の良い環境、会計士講座がつくれた良い流れにうまく乗ることができました」と、その勝因を分析します。入学後、軽い気持ちで会計士講座に入りましたが、そこでカウンセリングを受けたり、志ある友人たちとの交流で目標が明確に。高校時代は野球ばかりで全く勉強していなかった(本人談)ものの、「目指すなら本気で取り組んで3年次生で必ず合格する」と決意しました。講師のアドバイスでカリキュラムを先取りし、1年次に簿記1級を取得、「ここで頑張ったことがそれ以降の余裕を生みました」。2年次には簿記のインターラッジ「07年春季大学対抗簿記大会(資格の大原・大原大学院大学主催)」個人1級の部で優勝もしました。同じ志をもった仲間が集まる本学の「計修会」では、勉強法について多くの先輩から体験談を聞くことができ、試験までのペースメイクにおいて貴重な情報を得たそうです。また、1学年上に目標となる先輩がいたことも励みになったとのこと。「今後は、微力ながら自分も後輩の役に立てるよう、勉強法などアドバイスしていきたい」と頼もしい存在です。

中期留学プログラム「社会知性開発コース」 ～ニュージーランド・ワイカト大学 海外インターンシップ体験～

安津畑 卓さん 法学部法律学科4年次生



コミュニケーション力のある法律家を目指し、
中期留学プログラムに参加

僕の目標は、身近な法律家・司法書士となり、人を助けること。日本で会社設立をする外国人の補助などグローバルにも人の役に立てるようなりたい。そのためには今できることを考え、英語を学びたいと思ったんです。

ワイカト大学へ留学して、ペーパーを中心に学んでいた英語と、会話をするための英語の違いをはっきり感じ

ました。3ヶ月の語学研修後のインターンシップ先は現地のフリーマガジンの制作を行う会社。1ヶ月という短い期間でしたが、英語を使い営業から取材まで行い、貴重な経験に。そこでも、語学研修で養ったコミュニケーションの英語と、仕事での英語が違うことを身をもって知ることができ、非常に勉強になりました。

留学を通して英語力だけでなく、世界への意識、日本人としての誇りが生まれるなど、自分の視野が広がったことも大きな収穫だったと思っています。



右から2番目が安津畑さん。
右は営業指導をしてくれたトムさん。

島村 佳子さん 文学部英語英米文学科4年次生

英語で仕事という自分の目標が体験できる
インターンシップ制度に魅かれて参加

高校時代から英語が使える仕事をしたいと、短期留学も経験。そんな私にとって、2008年度に始まった中期留学の「社会知性開発コース」はすぐに実践の場が与えられるインターンシップ制度が魅力的で参加を決意しました。

普段から大学の国際交流センターを通じて留学生と交流をしていますが、仕事での英語はまた別の難しさがありました。免税店が研修先で、接客・コールセンター・ストック管理などを担当。人と接することが好きな私は接客が一番楽しかったのですが、好きなコスメ関係はスムーズにお勧めできたものの、あまり知識のないワインなどは本当に苦労しました。

でも、苦心して説明した商品をお買い上げ頂いたときには本当に嬉しかったですし、自信になりましたね。今後は英語を使った仕事をしながら、留学生のホームステイを引き受けなど国際交流に貢献していくけれどと思っています。



研修先の免税店でスタッフと。
中央が島村さん。

視点
2

III 知の発信のための研究開発

文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」採択 KS(川崎・専修)コミュニティ・ビジネス・アカデミー

2008年11月、KSコミュニケーション・ビジネス・アカデミーが開講しました。コミュニケーション・ビジネスとは、高齢者の生活支援、育児支援、教育など地域の抱える課題を市民が主体となって解決していく事業活動のこと。本アカデミーは、コミュニケーション・ビジネスについて初步から応用・実践までを系統的に学ぶことができる専門教育課程(大学院が設置した特別教育プログラム)であり、NPOなどコミュニケーション・ビジネス参画の専門ノウハウの獲得を目指します。主に定年退職を迎える方や子育てを終えた主婦の方々を対象とし、第二の人生における活躍の場としてコミュニケーション・ビジネスを創出し、かつ再チャレンジする市民のニーズに応えることが大きな目的です。

「KS」とは、川崎市の「K」と専修大学の「S」。2008年10月に締結した「専修大学と川崎市との連携・協力に関する基本協定書」に基づく事業として、川崎市と連携して開講しています。

講座は3ヶ月間の座学・ゼミナー、実習から構成され、講義だけではなく、NPO等での現場就業研修を盛り込んだ先駆的な教育プログラムであり、文部科学省「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム」に採択されています。

アカデミー長の経済学部 徳田賢二教授は「企業で経理やマネジメントなど、ノウハウを培ってきた人が経験を生かして地域で活躍してくれることを期待しています。そのためにアカデミーで地域の課題を理解してもらいたい」と語ります。

生活文化都市へ移行しつつある川崎市において、再チャレンジする人材と地域を結びつける本アカデミーの取り組みには、大きな期待が寄せられています。

○第2期 開講期間 平成21年5月8日～8月3日



パネルディスカッションの様子(中央は副アカデミー長 神原教授)

ステージ	内 容	期 間	講座数
導 入	(コミュニケーション論) コミュニケーションの意義と経済的な役割、その仕組みについて学ぶ。	5月8日～6月10日	4
共 通	(コミュニケーション・ビジネス論) コミュニケーション・ビジネスによる地域活性化の意義と役割について学ぶ	5月8日～6月10日	4
応 用	(コミュニケーション・ビジネス応用編) 2つの履修モデル(①NPO等現場参加を目指す人、②起業を目指す人)から選択し、少人数の演習方式で学ぶ	6月12日～7月15日	9
実 践	(コミュニケーション・ビジネス実践編) コミュニケーション・ビジネスを実践・体験する。	7月17日～8月3日	2

※合計16単位(16講座)以上の履修完了者には履修証明書を発行します。(1講座=90分×5回)

○第3期 開講予定 平成21年10月12日～平成22年2月上旬

視点
3

III 社会知性の開発を担う人材の輩出

「障がいをもつ子の活動範囲広げたい」 インドネシアに車いすを贈り続ける

戸津 亜里紗さん 2009(平成21)年3月 ネットワーク情報学部ネットワーク情報学科卒業

「アジア諸国では車いすが不足しているようです。そのために身体の不自由な子どもたちの行動範囲が広がらないのは残念と思い、日本で使わなくなった車いすを贈る運動を続けています」。

戸津亜里紗さんは、ボランティア団体「空飛ぶ車いす」の協力を得て、10年間で30台以上の車いすをインドネシアの子どもたちに寄贈してきました。戸津さんの活動は「第11回まちかどフィアンソロピスト賞」(日本フィアンソロピー協会主催)青少年部門賞を受賞し、新聞に紹介されるなど注目を集めています。

2008年3月には本学の海外研修・国際交流奨励制度の奨励生としてジョグジャカルタの障がい児学校を訪問、電動車いすの操作方法を直接指導するなど、現地で子どもたちとのふれあいも体験しました。

戸津さんは脊髄性筋萎縮症で生まれつき全身の筋力が弱く、自身も電動車いすを使います。大学教授で民族学を専門とする父の仕事柄、インドネシアを中心にアジア諸国をたびたび訪れ、その際、現地で車いすが普及していないことに気付いたと言います。「行動範囲を広げることで勉強の機会が増える。車いすが私の世界を変えてくれたように、一人でも多くの子どもに自由に外に出られる素晴らしさを知ってほしい」。この思いが活動の原動力です。

2009年4月からは本学大学院文学研究科に進学。「将来は、大学で学んだ技術を生かして自分の経験したことを見発していきたい」と語ります。



女子大生を通して見えるものを、世の中に伝える

小松 亜子さん 2001(平成13)年3月 文学部国文学科卒業
調査・企画・編集工房「エンピツむすめ」代表

「エンピツむすめ(当時はえんぴつ女房)」を立ち上げたのは、大学4年在学中でした。6歳から卓球をはじめ、中高時代は長野県でトップクラスにおいて常に追われる立場。卓球の名門専修大学に入学した大学1年生のときにケガをしてしまい、選手として続けることが難しくなりました。今後を考えて行く中で、大学の就職支援プログラムの一つであるマスコミ講座を受講。講師をされていた(株)表現技術開発センターの高田城先生と出会ったことが、今の小松亜子につながっているんですね。

私が発行人、編集長となり、60大学300人ほどの会員の女子大生を中心に、大学生のためのフリーペーパー「きゃんぱす☆まがじん」の発行や、卓球が縁で出会った三遊亭小遊三師匠の影響で目覚めた落語を知ってもらいたいと発行した「らくご☆まがじん」では、女子大生の目線で若者にPR。2003年に「きゃんぱす☆まがじん」で特集した、各省庁の白書などを女子大生の目で斬る「お役所文章にもの申す」が注目され、農林水産省などの白書作成チームにアドバイスをしたり、千代田区から招致されて、区役所作成書類などに添削、指導も行っています。2009年4月からは読売新聞で落語についてのコラムもスタート。そのほか、マーケティングリサーチも行い、商品開発の場にも多くの意見を提供しています。

日々目の回るような忙しさですが、卓球選手時代に身につけた「努力」と「ねばり」で、これからも多くの方に喜んでいただけるものを作り続けていきたいと思っています。まだまだ、いいものができたという満足には至りませんが、一つ一つ作り上げていくことを、女子大生の皆と楽しむ気持ちを忘れずにいきたいですね。



創立130年記念事業

<平成21年度予定>

- 専修大学「130人の顔」(6~9月 週刊ダイヤモンド13週連載)
- 創立者ブロンズ像の除幕式(9月16日)
- 創立者同時代展(9~11月 神田・生田・サテライト、東京芸術劇場)
- 創立130年記念式典・祝賀会(10月30日 ホテルニューオータニ)
- 記念講演会(10月)
- 記念コンサート(12月5日 ミューザ川崎)
- その他記念事業を各種予定

「Si-report」とは

「**Si**」とは……

「社会知性：Socio-Intelligence」の頭文字【S】【I】

と

「SENSHU Intelligence」の頭文字【S】【I】

を表現しています。

専修大学の社会知性をリポートしていきます。



シンボルマーク&カラー

Sの字は専修大学の[S]と21世紀ビジョン「社会知性(Socio-Intelligence)の開発」の[S]であり、そのSのブルーと曲線は大海原を表します。それが、地球上に見立てた緑の球体を包み込んでいる様は、専修大学で「社会知性」を育んだ人材が世界に輩出され、大海原のように激しく変化する国際社会の波に乗り、世界で活躍する様を表現しています。また、地球を表す球体は、大学のスクールカラーを使用しています。



専修大学マスコット
「センディ」

マスコット

体育会のキャラクターとして使用されているデザインをもとに、より多くの人に愛されるように更にかわいくデザインしました。獅子の顔と鳳凰の羽を配したこのデザインは、若者たちに、無限の可能性を持つ未来へ強く羽ばたいて欲しいという思いが込められています。

専修大学のシンボルマーク&カラー・マスコットは2005(平成17)年9月に制定されました

専修大学 学長室企画課

(神田校舎) 〒101-8425 東京都千代田区神田神保町3-8

(生田校舎) 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1

Tel : 044-911-1252 Fax : 044-900-7803

<http://www.sen-shu-u.ac.jp/>